回想法研究へのリクルートとリテンションに関する考察
―鳴松会協力のもとに―

Considerations of Recruitment and Retention of Older Adults for the Guided Autobiography Research: With “Meisyokai”the Alumnae of Mukogawa Women’s University

中　尾　賀要子*

NAKAO-HAYASHIZAKA, Kayoko

目次

はじめに
１．回想法研究へのリクルートとリテンションに関する考察に向けた方法
２．リクルートの経緯
３．リクルートとリテンションに関わるエピソードとその背景
４．リテンションの促進要因
おわりに

*武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科・准教授／教育研究所・研究員

はじめに

人を対象とした研究活動におけるリクルート（調査対象者の募集）とリテンション（調査対象者の研究参加完遂）は、研究を成功裏に終わらせるための最大の難関といえる（Penckofer, Bym, Mumpy, & Ferrans 2011）。リクルートには調査対象となる人々を一般の中から見出すこと、研究に関する適切な説明を行うこと、研究目的を達成するために十分な数の対象者を探し出すこと、計画した研究の倫理的配慮に則り参加同意を得ることなど複数の活動を含み、さらに参加に同意した対象者を途中で欠落させないリテンションの努力が不可欠である（AHRQ 2017）。研究活動にかかる時間と費用の過小な見積もりや参加者数に関する過剰な期待に対する警鐘はあるものの、リクルートとリテンションに関する実際の努力とその結果についての詳細な報告は極めて少ない（AHRQ 2017）。

一般的に高齢者は、リクルートとリテンションが困難な研究対象として名高い（Curry & Jackson 2003）。高齢者は機能低下や疾病発症、家族介護の発生といった不測の事態など、加齢に伴う変化により研究参加の辞退に至りやすい。また参加する場合は研究者の期待に応える必要があるなど、研究ということばがもたらす印象から参加目的を誤解してしまうこともある。

筆者は 2011 年から 4 年に渡り、「日本版ガイデッド・オートバイオグラフィー（Guided Autobiography）の妥当性検証」と題した高齢者を対象とする回想法研究を実施した（科研費 23530793）。Guided Autobiography（以下、GAB）参加者のリクルートには、武庫川学院の卒業生組織である「鳴松会」の協力を得て、R 地区在住の 65 歳以上の会員 880 名に依頼文を郵送した。GAB は 1 グループあたり最大 8 名の参加者を目安とした回想法で、約 3 ヶ月に渡り週に一度のグループ・ミーティングを実施する。参加者は各回に与えられるテーマに従って事前に回想文を綴り、ミーティングの際はグループメンバーの前で自分の回想文を読み上げることが求められる。メンバーはお互いに受容的な言動と態度で接することが基本ルールとして定められている。参加者が自らの過去を文章化して他のグループメンバーに開示するだけでなく、グループ・ミーティングに最後まで参加を続ける責任（コミットメント）を持つことが、この回想法の特徴といえる。この GAB に対して参加希望の連絡があった 16 名（1.82%）のうち、最後まで完遂した者は 11 名（1.25%）であったことは、高齢者のリクルートとリテンションの難しさを如実に示した一例といえる。

そこで本稿では、鳴松会会員を対象とした本研究の GAB 参加者の選定から終了までの過程をふりかえり、リクルートとリテンションにまつわる各エピソードの原因と結果を考察する。今回の回想法研究の経緯を整理することで、高齢者を対象とした研究や実践計画における留意点が明らかとなり、高齢者を対象とした研究活動の発展に資するのではないかと考える。

1．回想法研究へのリクルートとリテンションに関する考察に向けた方法

筆者が実施した回想法研究の経緯をふりかえるために、まずGAB参加者を募集した鳴松会に関する資料を整理した。次にリクルートとリテンションに関わるエピソードの記録を分類し、各エピソードが起こった背景要因を検討した。さらにふりかえりのグループ・インタビューで語られたことばを手掛かりに、GAB参加者の立場におけるリクルートとリテンションの促進要因を検討した。

上記の方法に沿って分析した結果について、本稿では1）リクルートの経緯、2)、リクルートとリテンションに関わるエピソードとその背景、3）リテンションの促進要因の順に説明する。

2．リクルートの経緯

まずリクルートの経緯に関する情報の整理から、鳴松会の概要、GAB参加者の選定基準、そしてリクルート方法と参加回答率について報告する。

（1）鳴松会の概要

鳴松会（武庫川学院鳴松会2013）は、武庫川学院の卒業生・修了生全員が入会し、2017年末現在、国内・海外各地に21万人を超える会員が所属する巨大卒業生組織である。武庫川女子大学中央キャンパスに本部を置き、全国各地及び海外に支部が創設されており、各会場では定期的な会合や催事の開催を通して鳴松会会員の交流が図られている。

1944（昭和19）年3月に卒業した武庫川学院高等女学校第1期生は、本研究を開始した2011（平成23）年には80代半ばに差し掛かっていた。わが国では女性の長寿記録が伸び続けていることから（厚生労働省2017)、女性高齢者に限定した回想法は、高齢者支援の現場の様相と符合する。さらに本学の中等及び高等教育を受けた女性たちのその後の人生を知る機会にも成り得ることから、総合すると鳴松会を通して参加者を募るメリットは大きいと考えられた。

（2）GAB参加者の選出基準

鳴松会の協力の下にGAB参加者を募集するにあたり、筆者が最も懸念した点は交通アクセスであった。加齢によるさまざまな変化は、時に高齢者の行動範囲を狭めてしまう。特に3ヶ月近くに渡る研究活動への参加維持には、予期せぬ身体的変化に見舞われやすい高齢者において通い易さがカギとなる。もう一点は、年齢層である。例えば65歳以上を対象とすると、下限の65歳に対して上限となる会員の年齢は80代半ばであり、その差は20年近くとなってしまう。研究計画を具体化する途上で、どの地域の鳴松会会員がどれくらいの頻度で中央キャンパスに来学して来るのか、また年齢の開きは地域によって異なるのかなど、鳴松会会員の現状について不明な部分が浮上した。

そこで鳴松会事務局に相談したところ、交通アクセスのよいR地区には65歳以上の鳴

松会会員が1000人近く居住しており、また近年は予期せぬ体調不良や入院・入所などで高齢の鳴松会会員の連絡が滞る傾向があるとのことであった。年齢の開きによる違いについては、各支部では同期のつながりよりは、寧ろ世代を超えた同窓生としての活動が活発であるとのことから、まずはR地区在住65歳以上の会員を対象として募集を掛けてみることになった。尚、研究活動のタイムラインは表1のとおりである。

表1．調査開始前から終了までのタイムライン（2014年）

時期	実施内容
6～7月	鳴松会事務局との相談
7～8月	R地区在住の鳴松会会員に対する研究参加への依頼
8月中旬	参加希望者への連絡と調整
9月上旬	グループ顔合わせ
9月中旬	GAB第一回
12月上旬	GAB最終回
12月下旬	総括（ふりかえりのセッション）

(3) リクルート方法と参加回答率

リクルートのために個別郵送した依頼文は、「R地区在住卒業生のグループ回想参加協力のお願い」、「R地区在住卒業生の回想法グループ予定表」「参加申し込み用紙」の三部構成とした。その中で研究者の自己紹介、回想法の実施方法、謝礼に関する説明を記載し、参加を希望する場合のみ返信を依頼した。返信には、郵便局の料金受取人払による返信用封筒を一枚同封し、予め応募者多数の場合は厳選なる抽選となる旨をお詫びのことばと共に明記した。

3．リクルートとリテンションに関わるエピソードとその背景

次に本研究のリクルート及びリテンションに関連して、グループの編成、天候による影響、参加辞退の理由をふりかえる。

(1) グループの編成

GABは同一曜日に2グループの実施とし、グループの編成については各参加者の希望を優先した。参加者募集の依頼文に午前と午後の2つの開催時間帯を提示したところ、偶然各グループが8名ずつの希望者で編成された。偶然とはいえ、この偏りのなさは時間の都合による参加辞退を防ぐ結果となった。しかし、GAB開始直前に1名が家庭の事情で参加辞退となり、午前のグループは8名、午後のグループは7名での開催となった。

また参加希望者の卒業年度から年齢を割出し、グループ別に精査しところ、回想法開始当初の午前のグループ（n=8）は平均74.3歳（標準偏差3.5、最大79、最少71）、午後

のグループ（n=7）は平均 72.6 歳（標準偏差 6.3、最大 81、最少 65）であった。GAB においては、参加者同士が既知であることは自己開示やグループ構築の妨げになりやすく、ある程度の共通性はありつつもお互いを知らない関係が好ましいことが実践知からいわれている。どちらのグループも年齢に大きな違いはなく、同級生で既知の関係である者もいなかったことから、編成の再調整は不要と判断した。

（2）天候による影響

筆者はリテンションを左右する影響要因として交通アクセスを重視していたが、悪天候による影響を想定していなかった。GAB の開始時期を 9 月とした際、終了までの 3 か月が日本の台風シーズンに丁度重なり合うという事実に、研究計画の段階では考えが及んでいなかったのである。GAB を開始して数週間経った頃、台風による暴風警報が早朝に発令されたことで大学が午前中休講となったのだが、これが HP を見ていた GAB 参加者に混乱を来しただけでなく、ミーティング会場としていた中央図書館の閉館によって教室変更が必要になるなど、想定外の事態に見舞われた。GAB のように継続的な活動の場合はグループメンバーの連絡網を作成しておくなど、万が一に備えて先回りの対策を講じておくことは筆者自身の不手際を痛感したことで得られた知見である。リテンションへの影響要因は多岐にわたるとしたうえで、あらゆる可能性を検討しておくことが望ましいと実感した出来事であった。

（3）途中参加辞退の理由

また GAB を開始してしばらくしてから、それぞれのグループにおいて参加辞退の申し出があった。プライバシー保護の観点から詳細は割愛するが、どのケースも本人の意思で参加を辞退したというよりは、突発的で不可逆的な事態の発生により辞退を余儀なくされたものであり、本人の体調不良だけでなく家族の健康問題といった加齢に伴う変化が背景にみられた。辞退者の多くは他の参加者に最後の挨拶を希望し、直接の挨拶が叶わない場合は筆者に手紙を言付けるなど、礼儀を重んじていた。

一方の参加継続者からは、辞退者が参加を断念しても今回の「御縁」を大切にしたいという声があった。そこで辞退者本人の許可が得られた場合に限り、筆者が時折近況を尋ね参加者に報告するというフォローを行うことで、双方の関係を間接的にでも維持するように努めた。Gyure et al.（2014）はリクルート段階における研究者の態度やエチケットに関連して、参加者の文化や信条に敬意と配慮を払うことの重要性を強調している。筆者の橋渡しがリテンションに直結したかどうかはわからないが、参加者と辞退者の思いを尊重し、間接的であっても双方のつながりが保たれるように努めたことは、グループとしての醸成に寄与したのではないかと考える。

４．リテンションの促進要因

最後にリテンションの促進要因として、贈り合う行為の意味と同窓であり近しいコーホートという共通性ついて考察する。

(1) 贈り合う行為の意味

GAB を開始して数週間が経過した頃から、庭で咲いた季節の花やお土産の御裾分けなど、参加者間で贈り物の行き来が見られるようになった。Mauss（2000）は、贈与（Gift Exchange）はお互いに敬意を払うための行為であり、贈与を通してつながりを持つことで自分を受け入れてもらい、他者を受け入れることであると説いている。日本文化における贈り物は、単なる物の交換ではなく気持ちの授受といわれる。参加者の間では贈り物に載せてお互いを思い合う気持ちのやり取りが始まっていたといえ、こうした行為の積み重ねは次に説明する「お茶の会」の実現に繋がったと考える。

GAB も折り返し地点に来た頃、ある参加者から「先生、私たち実はこの後いつもお茶して帰ってるの」という笑顔での報告があった。各回の GAB は少なくとも 2 時間から 3 時間を要する長丁場である。にもかかわらず、参加者は中央図書館 1 階のライブラリー・カフェに立ち寄り、在学生に交じってコーヒーを飲みながらひとしきり話をして帰るのだという。GAB 終了後、お互いに声を掛けあいながらライブラリー・カフェに連れ立って向かう参加者の姿からは、まるで旧知の友人がお互いを慈しみあうような仲の良さが伝わってきた。GAB を通した人生体験の共有だけでなく、負担にならないようにと配慮されたささやかな贈り物の交換は、グループの一体感をさらに高めたのではないだろうか。

(2) 同窓でありコーホートという共通性

もう一つのリテンションの促進要因として、同窓でありコーホートという共通性について言及しておきたい。GAB 終了後に実施された総括の回では、参加者の多くが GAB 開始当初は不安を感じていたと発言した。それは回想法という未知の活動に対する不安ではなく、面識のない鳴松会会員との人間関係に対する不安であったという。たとえ同窓であっても「知らない人」ばかりの場であることに変わりはなく、最初の数回は自分の発言に慎重になり、曖昧なことばかり話していたと告白する参加者もあった。

そのような閉塞感のある関係性に風穴を開けたのは、GAB 参加者自身であったといえる。ある参加者は「同じ学校を卒業した皆さんは、私の遠い親戚みたいなもの」という別の参加者の一言によって、「そんなに信頼して下さるのなら、私も信頼しようという気になった」と気持ちの変化を振り返った。さらに別の参加者は、「皆さんのお話やらお顔を見てて、（ここは）信頼できる場だなと。そしたら、全部さらけ出そうという気になったの」と話し、信頼が生まれた瞬間を思い返していた。これらは双方向の信頼関係の基盤を固める上で分岐点となったエピソードであり、同窓という共通性が信頼関係の土台に据えられた結果であるといえよう。

コーホートとは、集団や群れを指す人口統計上の概念であり、特に特定の期間に出生したことで歴史的な出来事やその時代の価値観を共有する世代を意味する。参加者はGABの回数を重ねる毎に、キャンパスのあちこちを探索して歩くようになったという。そして建物が近代化した母校を「すごく変わった」と一様に驚き、「ここには木造の校舎しかなくて」と在学当時を懐かしんでいた。続けて、「公江（喜市郎）先生はいつも自転車で通っておられた」「今はまだ小さいけど、君たちの娘さんやお孫さんの時にはもっと立派な学校になっているからとよく言っておられた」など、本学の歴史の中でも校祖の時代を肌で知る卒業生ならではの話で盛り上がった。このように学院の歴史を共有するコーホートとしての近接性も、参加者のリテンションに奏功した要因ではないかと考える。

おわりに

同窓でありコーホートである高齢の鳴松会会員を対象とした研究は少なく、発展の途にある。筆者が従事した回想法研究は、日本の高齢女性におけるGABの実用性をみるという観点でアプローチしたものだが、鳴松会会員を対象とする研究であれば、例えば、高等教育が女性の人生に及ぼす影響や、娘や孫といった異世代への影響など、これまでにない視点から女子教育のあり方を探求することも可能であろう。長期的視座に立った女子教育の効果に関する報告が待たれる今、高齢者を含む鳴松会会員の声を丁寧に聞き取ることは、今後の女子教育の方向性を検討する上で重要な指標となるのではないだろうか。

本稿のリクルートとリテンションに関する一考察からの示唆が、今後の鳴松会会員を対象とした研究の展望をさらに開くことを期待する。

引用文献

Aguirre, T. M., Koehler A. E., Joshi, A., & Wilhelm, S. L.（2018）. Recruitment and retention challenges and successes. *Ethnicity & Health*, 23(1), 111-119.

AHRQ［Agency for Healthcare Research and Quality］（2017）. Health information technology archive: Participant recruitment for research. Retrieved from https://healthit.ahrq.gov/ahrq-funded-projects/emerging-lessons/participant-recruitment-research on March 23, 2018

Curry, L., & Jackson, J.（2003）. The science of including older ethic and racial group participants in health-related research. *The Gerontologist*, 43(1), Feb, 15-17.

Gyure, M. E., Quillin, J. M., Rodriguez, V. M., Markowitz, M. S., Corona, R., Borzelleca, J. J., Bowen, D. J., Krist, A. H., & Bodurtha, J. N.（2014）. Practical considerations for implementing research recruitment etiquette. *IRB: Ethics & Human Research*, 36(6), 7-12.

厚生労働省（2017）．平成28年簡易生命表の概況
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life16/dl/life16-15.pdf（2018年3月27日）

Mauss, M.（2000）. *The gift: The form and reason for exchange in archaic societies.* Translated by W. D. Halls. W W Norton & Co Inc（*Essai sur le don. Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques, Presses universitaires de France*）.

武庫川学院鳴松会（2013）. http://www.meisyoukai.gr.jp/index.html（2018 年 3 月 27 日）

Penckofer, S., Byrn, M., Mumby, P., & Ferrans, C. E.（2011）. Improving Subject Recruitment, Retention, and Participation in Research through Peplau's Theory of Interpersonal Relations. *Nursing Science Quarterly,* 24(2), 146-151.